

神社祭祀にみる祈りのかたち
— 武蔵一宮 氷川神社大湯祭神事と神饌から —

佐藤 ひろみ*

Form of Prayers Offered During a Shinto Shrine Festival
:An Investigation of the Rituals and Offerings of the Musashi
Ichinomiya Hikawa Shrine Daitousai Festival

Hiromi SATOH

1. はじめに

宮田登は著書『日本を語る カミとホトケのあいだ』の中で、日本人の宗教観について日本人が日常生活の中で自然発生的にかつ無意識のうちに行っている習俗（風俗）を通して研究し、広く日本文化の全体像をとらえるという観点、つまり宗教の様々な概念、たとえばキリスト教、仏教、あるいはイスラム教といった世界的な大宗教のもつ独自の思想や教義、神の教え、仏の教えなどについてではなく、そうした宗教を受け入れた庶民の精神構造や生活文化に焦点をあてて語っている。そしてさらに一般的には神社を中心とした伝統的な神社神道と生活の中の習俗として自然に展開している民俗神道（民間神道）、日々の日常生活の中で無意識裡にしている行動から自然に芽生えた宗教的意識がつくられ、文化の体系の一部を占めていると指摘している。

現在の神社で多くの人々が祈願する内容は、まさにその指摘にあたるものであり、初詣や七五三祝、安産祈願から厄除け、交通安全祈願などは、生活の中の必要に応じた願いとして、かたちを変えて続いている。神社の祈願案内では人生の節目に沿って祈願内容が列記されている。

日本各地の神社祭祀に伝わる精細な研究は、先学の歴史学、宗教学、考古学的な専門的研究成果にすでに明らかである。ここでは、古代から連綿と継承される神社祭祀の生活文化的側面に焦点をあて、生活の中でそれを継承し受容してきた人々の祈りの姿をみることにより、祈りのかたちについて考察する。さらにそこから、僅かながらでも、古代から今に続く人々の神観念や心意について模索できればと考えている。すでに拙稿においては、豊穰を祈ることを最優先とし、大自然に対する畏怖から想像の霊獣である龍や蛇や河童、あるいは光と雷鳴の雷に具象化された水

* さとう ひろみ 文教大学人間科学部

神を御祭神として祀った古代の人々の祈りについて論じてきた。今回はさらに特殊神饌が奉られる神事を通して祈りの姿をみることにする。日本の生活文化の基層を成しているといわれる日本人の神観念や心意を知ることが視点として祈りのかたちを探りたいと考えている。

またここでは、研究資料として昨年撮影した、武蔵一宮大宮氷川神社 大湯祭神事の写真と奈良桜井市多武峰談山神社 嘉吉祭神事における神饌の写真からも祈りの実際をみていくことにする。

2. 神社由緒と主祭神の三柱の神々

社伝によれば大宮氷川神社は今からおよそ 2000 有余年前、孝昭天皇 3 年（紀元前 473 年）に創建され、主祭神は須佐之男命（スサノオノミコト）稲田姫命（イナダヒメノミコト）大己貴命（オオナムチノミコト）の三柱の神であるとされる。古事記の神代篇の神々の系譜としてよく知られている神である。とくに大己貴命は大国主命神（オオクニヌシ）の呼称で昔から広く日本人に親しまれている。須佐之男命の子孫にあたり天照大神の子孫（御孫ニニギノミコト）に国譲りをした国土豊穰の神として著名である。稲田姫命は須佐之男命の妃で八岐大蛇伝説に登場する。いずれも国土開発や豊穰の神とされ、とくにイナダヒメノミコト稲田姫命は稲に関係する豊穰の神とされ祀られている。

また第 12 代景行天皇の時代に日本武尊が東征の際に当地に立ち寄り祈願したといわれ、成務天皇の時代に天邪志（ムサシ）武蔵国造・兄多毛比命（エタモヒノミコト）が出雲族をひきつれてこの地に移り住み、祖神を祀って氏神としたという。聖武天皇のとき氷川神社は「武蔵一宮」と定められ、さらに醍醐天皇の延長 5 年（927 年）の「延喜式神明帳」に名神大社としての社格が与えられている。1180 年に源頼朝によって社殿の再建がなされ、以来、鎌倉、北条、足利、徳川氏等、武門の信仰も篤かったとされる。明治元年（1868 年）東京遷都に際し、武蔵国総鎮守「勅祭の社」と定められ明治天皇自らが親拝されている。明治 4 年官幣大社となり、現在の社殿は昭和 15 年に改造竣工され、近年に至るまで祭祀が執り行われている。大宮氷川神社はさいたま市大宮区に鎮座する神社である。武蔵国一之宮・延喜式内名神大社であり、また氷川神社の社名は大宮を中心にして埼玉県下に 160 余社、東京都、神奈川を合わせて 280 社を数える。これは武蔵国造の子孫が大宮を中心に祖神を祀り、武蔵国内に政治的民族的に著しい発展をしてきたことを物語っているといわれる。また大宮の地名は氷川神社を大いなる宮すなわち大宮と称えたことに由来し、明治以後は国都が武蔵国に遷都されたことから宮中祭祀の対象に加えられ、皇室からも重んじられてきたとされている。

3. 大湯祭

大湯祭（だいたうさい）は大宮氷川神社で江戸時代から行われている古式ゆかしい神事で、氷川神社略記によれば、当神社特殊神事中最も著名なものとされる。延宝年間の社記にはすでに大湯祭の文字がみえており、かなり古い時代から行われてきた祭典と思われる。大湯祭は毎年 12 月 10 日に特殊神饌が供えられる本祭が執行される。12 日間にわたって執り行われる長い祭祀である。一般的には十日市・熊手市ともいわれ、この日は神社の参道で大歳の市が開かれ現在でも人々に親しまれている。縁起物の熊手やだるまなどを売る露店が立並び、商売繁盛を願って熊手を買って求める多くの参詣者で賑わう祭りである。

大湯祭前齋は11月30日から12月9日の期間に執り行われる。大湯祭前齋の期間は毎夜神職が祓いをした後、境内にかがり（篝）火をたき上げ祭事を行う。篝火の灯火は19時半からでこの火にあたると無病息災、火防の御神徳があるといわれており、多くの人々がかがり火を囲んで手をかざして、その年の無事を祈る姿があった。

大湯祭本祭は12月10日に行われ、百取膳（百味膳ともいう）という特殊神饌が神前に供えられる。海川山野の種々の神饌を熟饌として奉る荘厳典雅な祭典が執り行われる。同日には参詣すると大己貴命オオナムチノミコト（大國主命オオクニヌシノミコト）と少彦名命スクナビコノミコト（恵比須様）の2福神（御姿）の神札と福熊手が授与される。また福種銭の授与をするところから大黒市ともいわれている。福種銭とは古くからの民間信仰で、お賽銭の一部をお祓いした縁起の良いお金と替えて商売の元金（種銭）としたものであるという。これは見沼の名残とされる神池の中に奉られている宗像神社の御札所で授与しており、当日は夜遅くまで福種銭と祈願を受ける人が列をなしていた。宗像神社の祭神は多起理比売命（タギリヒメノミコト）、市寸鳥比売命（イチキシマヒメノミコト）、田寸津比売命（タキツヒメノミコト）である。多起理比売命は大己貴命の妃であり、天の安川においてアマテラスとスサノオのウケヒによって生まれた神で宗像神社の水の三神の女神である。

大湯祭後齋、誓詔祭は12月11日午前10時過ぎより拝殿で執り行われる。大湯祭後齋（写真1～6）は本殿にて後齋を奉仕した後に齋館において饗膳式という古式ゆかしい直会が行われる。これにより潔齋が解かれ大湯祭が終了する。誓詔祭は神社略記によれば明治天皇が氷川神社に自ら奉祭されたことからはじめられた祭典で後齋とあわせて行われる神事である。なお後齋については拝殿の間近での写真撮影の機会を得、拝殿の後齋神事から巡拝、直会が執り行われる齋館へと移動するまでの様子（写真7～9）を撮影した。大湯祭の参詣や熊手市、露店市の詳細については紙数の関係で写真（17～28）と写真下に記載。

4. 大湯祭特殊神饌【百取膳（百味膳）・鮎串と菱餅】

大湯祭神事と供えられる特殊神饌百取膳（百味膳）は、今でも潔齋した宮司や神職によって古式ゆかしく執り行われ、神饌を直接目にはすることは出来ない。談山神社嘉吉祭神事における百味御食のような事後の一般公開もなされない。神社略記によれば、特殊神饌は百取膳（写真10と図1に示す通り）と鮎串と菱餅（略記による写真10～12）とからなる。また日本料理歳時大観傳承十二月（1980年）に掲載された同特殊神饌と直会の様子は写真13～16に示した。百取膳の食材は盆膳左側にはクルミ・ショウガ・干柿・トサカノリ・伏兎（ブト）・トコロ・クリなど山で採れた草実、蔬菜類であり、盆膳右側にはタコ・スルメ・小鮎・鯉・鰹節・雉・熨斗（ノシ）・塩カツオなど海や川で採れた鳥獣魚介類である。神職の話では古くはすべてのものが氷川神社の山（現在は境内の森や大宮公園となっている山）や近くの川で採れたものが奉られていたという。現在ではほとんどは食材を後述する神饌奉納者により遠方より取り寄せて奉納されているということである。古代には大宮氷川神社・氷川女体神社・中川神社の三社はかつて海であった見沼に臨んで立地していたことを考えると川で採れる鮎や鯉に加えて、海の幸が多いことも納得できることである。大宮氷川神社における神饌の特徴はまさに海川山野の種々の神饌を熟饌として奉られている百味膳（ひやくみぜん）の呼称に相応しいものである。神職のインタビューの中で、「昔は本来、神社の山内で採れた多くの種類の神饌が奉られていたのですが、現在で



写真1 大湯祭後斎神事 拝殿で執り行われる
12月11日10時20分



写真2 大湯祭後斎神事 (2) 10時50分
この間、神前右側対面で雅楽の鳴物が
続く



写真3 舞殿の前を通り巡拝のため楼門に向かう



写真4 楼門より宗像神社の方角に向かって巡
拝 拝礼
後斎11日雨天により三社巡拝は楼門
で行われた



写真5 楼門より宗像神社 (多起理比売命・市
寸島比売命・田寸津比売命) の方角に
向かって略式巡拝



写真6 摂社 門客人神社(足摩乳命・手摩乳命)
末社 御嶽神社(大己貴命・少彦名命)
巡拝



写真7 後齋を奉仕した後、三の鳥居を通過して
勅旨齋館へ向かう



写真8 勅旨齋館で饗膳式という直会の儀が執
り行われる



写真9 結界されている勅旨齋館の門
潔斎が解かれ12日間の大湯祭神事が
終了する
(写真1～9は2009年12月撮影)



写真10 武蔵一宮氷川神社 大湯祭神事 特殊神饌「百味膳」(ひゃくみぜん) 百取膳(ももとりぜん)
(2009年神社略記より)

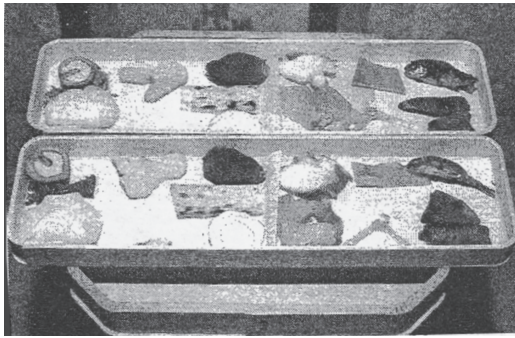


写真 11 神前の百味膳 (2膳)
2009年12月 同神社祭典月案内より

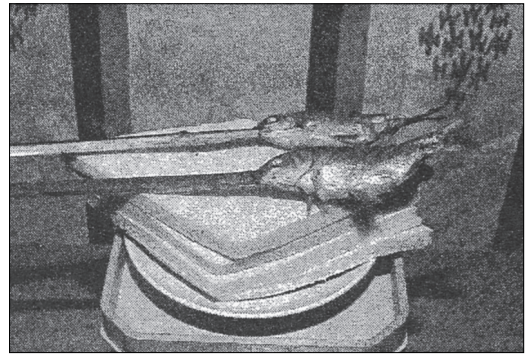


写真 12 鮒串と菱餅 (熟饅頭)
百味膳とともに供えられる

武蔵一宮氷川神社略記、11月12月同神社祭典案内より

(大湯祭神事の神饌の撮影は2009年現在も不可。許可されない。開催月の祭典案内の写真掲載と祈祷受付横の神饌奉納者名が掲示板に公開されるのみで一般が見ることは出来ない。当神社神饌は潔斎して12日間の神事を執り行う神職によってのみ供えるということが厳しく継承されている。)

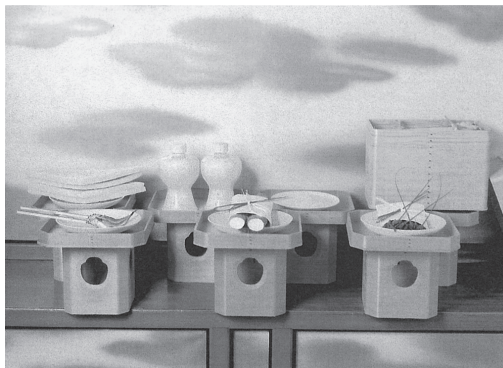


写真 13 大湯祭神饌 神前百味膳
(写真13~16の出典は1980年発刊
日本料理歳時大観 傳承十二月)



写真 14 百味膳 (小鮒 鯉節 塩鯉、鯛 鮑熨斗、
蛸 鯉 雉子、干柿 長芋 栗、生姜 草
薺、胡桃 鶏冠海苔 伏兔餅)

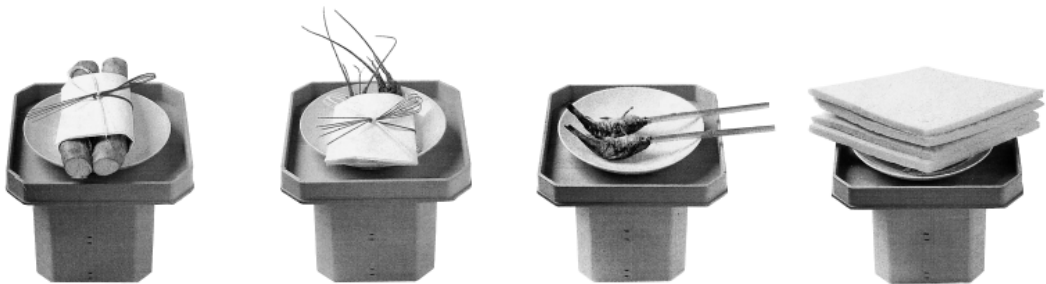


写真 15 長芋 海老 (伊勢海老) 串刺小鮒 菱形餅

この写真の日本料理歳時大観 傳承十二月においては菱形餅と小鮒の串刺しは別の三方に盛られているが、2009年の祭事月案内掲載写真では菱形餅の上に大振りの鮒串をのせてある。

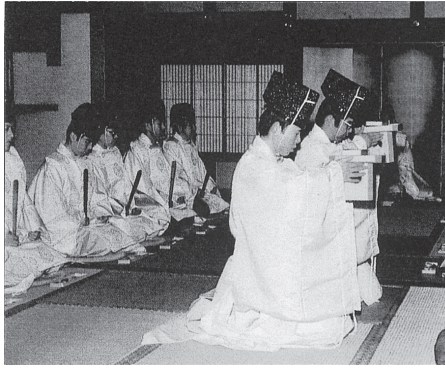


写真 16 直会

本祭後齋に引き続き古式の直会
(宮司、神職、崇敬者代表)

『12月10日の本祭には、菱餅、海老、長芋、大鮎串刺等の神饌の他に、百取膳(百味膳)海山川野の幸を細長い経木の膳にとり集めたものを、本社三座六十膳(各二十膳)、摂末社十膳、檜製曲物に納めて奉ります。この御神饌の材料は毎年各地の崇敬者御篤志の方々から御奉納になり、神職が10日間の参籠潔斎のうえ調理いたします。』

氷川神社宮司 東角井光臣氏 記述
日本料理歳時大観 傳承十二月 大湯祭より

胡桃 クルミ	生姜 ショウガ	干柿	蛸 タコ	鰯 スルメ	小鮎
鶏冠海苔 トサカナノリ		長芋	鯉		鯉節
伏兎 ブト	萆薢 トコロ	栗	雉子 キジ	熨斗 鮑パン	塩鯉 シオカツオ

図 1 大湯祭特殊神饌 百取膳(百味膳)

胡桃(三峰神社)・生姜(大和田氏子中)・蛸、鰯、塩鯉、鶏冠海苔、海老、栗、鮑熨斗(魚志やう)・雉子(大宮獵友会 秩父獵友会)・鯉(株式会社鯉平)・大鮎(埼玉県南部漁業組合)・長芋(七里敬神講中)・萆薢(吉野町氏子中)・鯉節(株式会社信濃屋)

は山内では採れなくなり、すべてを揃えることは難しくなって来たので、遠方からも奉納されます。」という話が印象的であった。古来には伊勢神宮など同様に神社山内や神社の結界された土地で採取したものを供えたものと思われる。

百味膳が祀られる神事は大湯祭の祭祀が執り行われる12日間の長期にわたって潔斎した数名の神職によってのみ莊厳に執り行われるため、現在でも神職以外が目にする事は出来ない。神事当日は祈祷所横の回廊に百味膳神饌奉納者が示されている看板と垂幕が出されていた。それによると海川山野の食材は大宮氷川神社・氷川女体神社・中山神社の三社が位置する大宮・大和田・七里・吉野町などの氏子や講中、漁業組合や川魚を取扱う会社から奉納されており、遠くは秩父の三峰神社、秩父獵友会からも奉納されている。

境内看板に公開されていた百取膳(百味膳)の神饌名と神饌奉納者は次の通りである(図1、写真19、20)。図の中の伏兎(ブト)とは片栗粉を水で練って、中心にきな粉を溶いたものを入れたもので形状はギョーザを少し小さくした形である。また萆薢(トコロ)とは芋の一種で形は生姜に似ており苦味がある。熨斗(ノシ)は干し鮑のことである。伏兎は春日大社やその他の多くの神社で神饌としてよくみられるものであるという。また百味膳とともに供えられる菱餅の上

に飾られる鮎串は地域で捕れた大鮎を串刺にして焼いたものであるとのことである。(神職の説明による。)

5. 神饌

神道辞典によれば、神饌とは神前に供える飲食の総称で、古くは「ミケ」という。古代から神の出現、降臨を願い神饌を供えて神をもてなし、神と人が共に宴をする「神人共食」が日本の祭りの特徴とされている。酒・水・塩・穀類・草実、蔬菜類、鳥獣魚介類などを人が採取し、作りうる最高のものを最上に飾り付けて供えたと考えられている。その意味では神饌は古代人の食生活を反映したものといってもよい。さらには日本人の食生活のルーツや食環境を現すものとして、また地域の食生活の変遷をみる上でも重要な継承であると考えられる。明治8年(1875年)に官幣社以下神社祭式が定められて以来、全国的にかなり画一化されたといわれているが、特殊神饌として独特の神饌を継承しているところも少なくない。例えば昨年調査した奈良多武峯談山神社「百味御食(ひやくみのおんじき)」は嘉吉祭神事の特殊神饌として著名である。また今回とりあげた大宮氷川神社「百取膳(百味膳)」は古くから武蔵国伝わる特殊神饌として紹介されている。神饌は生のまま供える「生饌」と調理したものを供える「熟饌」、生きたものをそのまま供える「生贄」、また魚肉を除いたものの「素饌」が代表的なものとされている。

ここでは参考までに大宮氷川神社「百味膳(百取膳)」との比較対照として昨年収録した談山神社「百味御食(ひやくみのおんじき)」の写真を示した。(写真29~36)神社の立地環境(自然)や食環境が明らかである。前者は大湯祭神事の特殊神饌で「海川山野の熟饌」であり、後者は嘉吉祭神事の特殊神饌で「穀類の彩色飾りが特徴的な、山野の草実や蔬菜の生饌・素饌」である。嘉吉祭神事「百味御食」の詳細については次の報告に譲る。

6. 見沼に臨む氷川神社 三社

大宮氷川神社(男体)・中山神社(中氷川神社、簸王子社)・氷川女体神社)

前述のように社伝によれば、大宮氷川神社(男体)は孝昭天皇3年に創建。成務天皇の時代に出雲の兄多毛比命(えたもひのみこと)が武蔵国造となり社を奉ったとされる。つまり氷川神社三社がある一帯はこの出雲からきた武蔵国造と出雲族によって開拓された地であるという。社名の「氷川」も出雲の「簸川」に由来するという説がある。延喜式神名帳では名神大社の社格があたえられ、武州六大明神の一つとされる。古くは水神であったという。(氷川神社は男体・簸王子・女体の三社に別れ、それぞれ岩井家・東角井家・西角井家が神主を世襲していた。女體(体)社は現在の氷川女體神社(緑区宮本)であり、簸王子社中山神社(見沼区中川)は中氷川神社とも呼ばれ氷川神社(大宮区)とともに一体の氷川神社を形成していたという説がある。)かつては氷川神社と氷川女體神社の間に「見沼」という大きな沼があり、氷川女體神社はかつてこれを御手洗瀬として「御船祭」を行っていた。吉宗の時代に見沼が干拓されて水田となってからは、「磐船祭り」は行われなくなり祭祀場は現在遺跡として保存されている。女體神社の主祭神は稲田姫命である。八岐大蛇伝説で須佐之男命はオロチを退治し稲田姫命を貰い受ける。先に述べたが稲田の名とおり水田耕作の神として祀られた。現在では氷川神社に合祀されているが、かつては女體神社にのみ奉られていたため、氷川女體神社には「武蔵一宮」の額が掲げられてい



写真 17 2 福神御姿の神札と福熊手を求める参詣者 2 福神：大己貴命（大國主）・少彦名命（恵比寿）



写真 18 福熊手は稲穂・打出の小槌・米俵が付き、2 福神にちなんだ豊穡と繁栄を祈る縁起物（本齋日夜）

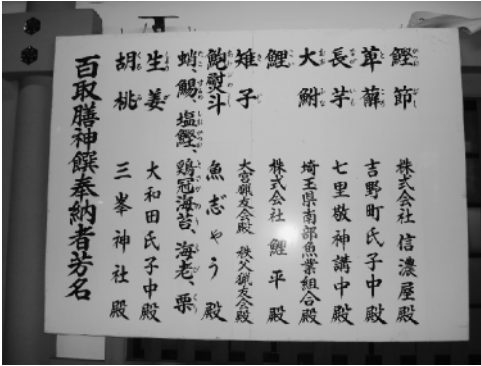


写真 19 百取膳神饌（海川山野の神饌）と奉納者芳名（10 日大湯祭本齋日 祈祷受付所右側回廊）



写真 20 清酒の他、重餅、人参、りんご等も奉納されていた（百取膳神饌奉納者の看板掲示と並ぶ）



写真 21 縁起物の熊手を売る数多くの露店が立並び酉の市の範といわれる



写真 22 商売繁盛を願って熊手を買求める参詣者（買い上げると手締めをして縁起を担ぎ運を呼ぶ）

大湯祭参詣者と熊手市（写真 17～22、2009 年 12 月撮影）



写真 23 古くから神棚を売る露店（岩槻市 宮宏御宮製）数軒が出店、大きく立派なものが数多く並ぶ



写真 24 今は珍しくなったおひつや蒸籠などの曲げ物やまな板などを売る露店（岩槻市内の木工所）



写真 25 神池には宗像神社が勧請祭祀され、商売繁盛祈願の参詣者で賑わう。旗は神が降臨する依代



写真 26 宗像神社の祭神は田起理比売命（大國主命の妃）、市寸島比売命・市寸津比売命が祀られている

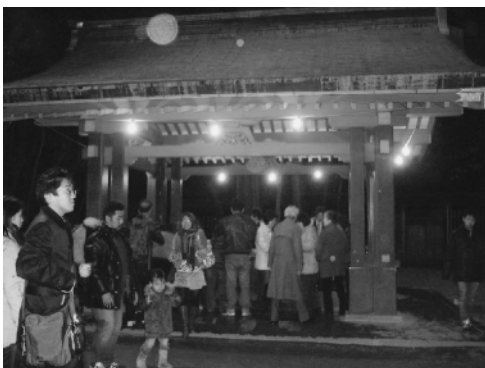


写真 27 楼門手前の手水舎で手を清める参詣者



写真 28 宗像神社前の商売繁盛を願う祈祷所
大湯祭本斎 10 日夜祈祷を受ける人が絶えない

大湯祭参詣者（宗像神社付近）と露店市（写真 23～28、2009 年 12 月撮影）



写真 29 多武峰談山神社 (奈良県桜井市) 嘉吉祭神事
談山神社 嘉吉祭神饌 百味の御食 (拝殿内)



写真 30 特殊神饌「百味の御食」(ひゃくみの
おんじき)
米粒を赤、青、黄で染めた 和稻 (にぎしね)



写真 31



写真 32



写真 33

银杏、豆、茗荷、椎茸、柚、栃の実、鬼灯、唐辛子 (上部)、繭玉 (下部)、芋茎 (中心部)
多武峰の秋の収穫物



写真 34 神殿 御祭神は藤原鎌足
大化改新で中大兄皇子 (天智天
皇) と共に著名



写真 35 拝殿の回廊
(神殿は左側)



写真 36 嘉吉祭神事後、神饌は
拝殿で参詣者に披露

(写真 29~36、2009 年 10 月談山神社来訪撮影)

る。社伝によれば崇神天皇の時代に出雲杵築の出雲大社から勧請されたことになっており、社伝では二千有余年前の創建とされている。三社の主祭神は須佐之男命・大己貴命・稲田姫命であり、出雲神話に登場する神々である。稲田姫命は須佐之男命の妃であり、大己貴命は須佐之男命の子孫にあたる。この神々は古事記神代篇に伝えられるように大地の開拓神、稲の豊穰をもたらす神々としての役割を当地で担っていたものと考えられる。三社は古代には海が入り込み、徳川の干拓前は沼であった見沼（御沼）を臨む場所に現在でも位置している。しかもそれは冬至と夏至を示す稲作農耕の暦となる位置にあるとされている。また大宮氷川神社の神池は見沼の名残であるという。

7. おわりに

大湯祭神事においては、記紀の神々に古来より連綿と祭祀され続けられてきた祈りの姿をみた。境内に勧請された宗像・愛宕・雷神・住吉・天満・御嶽など各地の多様な神々を奉る社は、日本人の祈りの生活文化の縮図のようでもあり、日本文化を知る貴重な具体例でもある。さらに深く神社祭祀の歴史や由緒を掘り下げていけば、日本人の古来から現在に至るまでの寛容な神観念や心意を探す手掛かりも僅かながら掴める。天照大神・須佐之男命・大己貴命・稲田姫命といった記紀に伝わる国家祭祀の神々から、人々がその時代の暮らしの中で必要に応じて勧請した恵比須、大黒などの福神や疫病神あるいは稲荷といった民間祭祀の神までが境内に数多く祀られている。一宮は国家祭祀を奉仕する場所として全国に造営されたのであるが、それらの国家的な神社祭祀と並んで人々の生活の中で暮らしの必要に応じた願い事や祈りに利用されているというのが実際である。繰り返すことになるが、これらは人々の信仰の足跡であるとともに生活文化そのものであり、日本人の祈りの文化の一部でもある。

今回の大湯祭神事における特殊神饌「百取膳」は古代の食生活を具体的に伝えるだけでなく、神々に出来得る限りの御馳走（神饌）を供えて宴を共にして来た“神人共食”の祈りの姿を今に伝えている。古代から日本人は山や水や木などの自然、雷や噴火などの自然現象、目に見える身近なものすべてを神とみなして生きて来た。時代によっては疱瘡神や疫病神といった人に害を及ぼすアラハバキの神々までも神として祀り祈ってきたのである。その神観念は寛容であり、受容性に富んでいるわけである。多くの神々をその時々での生活の必要性に応じて、機能別、役割別に求めて祈って来たのである。神饌を供え神をもてなしたのである。

そうした神饌の伝承は人々の生活の歴史を伝えるものとして、また人々の食環境や地域の特産物を伝えるものの具体例としても重要である。遡ればその地域の時代の生活環境や自然環境までもうかがうことができるものとして大変貴重である。併せて立つ十日市（熊手市）からは地域の人々の生活や日本の文化を再確認することが出来た。利便性や必要に応じて勧請された神々や、神事に併せて立つ市での露店やそこで売られている熊手や縁起物、神棚や授与される福銭・神札・などは庶民の生活文化そのものの具体例であり、日本の暮らしの中で育った祈りの文化の一部でもあるといえよう。そこには日本人の生活の中で培われた素朴な神観念と祈りの姿が伝えられている。神社祭祀を通して祈りのかたちの一例をうかがうことが出来た。

最後に神饌についてのインタビューの中で「昔は神社の近くの山や畑や川で採れたものを、現在よりも種類のを神饌と奉げていたのですが、今では以前より神饌種類がはるかに少なくなり、遠くから奉納される神饌も多く含まれるようになって来ている」との祭祀ご担当の神職の

話が印象深い。そうした中で当地の氏子中や講中、漁業組合や遠くは三峰神社などから、多くの人々の協力のもとに連綿と続けられて来た特殊神饌の継承は、日本の生活文化としての“祈りのかたち”を伝える具体例として大変貴重である。

謝辞 大湯祭神事および百味膳についてのインタビューにご協力頂いた神職の池永衛治、遠藤胤也、新渡戸常英氏に深謝いたします。

参考文献

- 1) 大宮市教育委員会市史編纂室、大宮市史 第1巻 考古編 (1968)
- 2) 大宮市教育委員会市史編纂室、大宮市史 第2巻 古代：中世編 (1971)
- 3) 大宮市教育委員会市史編纂室、大宮市史 資料編 1, 2, 3 氷川神社神主日記 (1975～1993)
- 4) 埼玉県県民部県史編纂室、新編埼玉県史 通史編 1 原始・古代、2 中世 (1979) (1998)
- 5) 埼玉県県民部県史編纂室、新編埼玉県史 資料編 18, 25, 26 巻 (1998)
- 6) 松本玄智江・山下一也、神道辞典、筑摩書房 (2005)
- 7) 佐藤ひろみ、水神のルーツと生活文化：貴船と阿蘇の水神探訪から、生活科学研究第23集 p91-104 (2001)
- 8) 佐藤ひろみ、水神のルーツと生活文化Ⅱ：若狭から奈良へ、お水送り神事・お水取り神事の周辺から、生活科学研究第26集 p121-136 (2004)
- 9) 宮田 登、日本を語る6 カミとホトケのあいだ、吉川弘文館 (2005)
- 10) 日本料理歳時大観、主婦の友社 (1980)
- 11) 西郷信綱、古事記注釈第1～3巻、ちくま学芸文庫 (2005)
- 12) 大和岩雄、神社と古代王権祭祀、白水社 (2009)
- 13) 三宅和朗、古代の王権祭祀と自然、吉川弘文館 (2008)
- 14) 井上光貞、日本古代の王権と祭祀、東京大学出版会 (2009)
- 15) 正木 晃、宗像大社・古代祭祀の原風景、日本放送出版協会 (2008)
- 16) 三浦祐之、古事記講義、文春文庫 (2007)
- 17) 三浦祐之、口語訳 古事記 神代篇、文春文庫 (2007)